

最近、週刊誌や月刊誌による水道水批判が目につく。まともに反論するのでも大人気ないが、新聞広告に載った『水道水を飲み続けると』『がん発症』『痴呆症』の危険』『今でも水道水を汚染する有害物質ダイオキシン』（財界展望）、『水道が危ない』アスベストより危険な水道管の発ガン性塗料』（週刊新潮）といった大きな活字を目にして黙っていられなくなつた。雑誌や週刊誌を購入しなくても、この刺激的な文句はいやでも目に入る。新聞広告だけを見て『水道水は危険』という誤つた認識を抱く人は少なからずいるだろう。家庭の子供たちの目につくかもしれない。財界展望は「日本の水が危ない」というシリーズを毎月掲載しており前述の『水道水を飲み続けると』『がん発症』『痴呆症』の危険』は8月号に載つた。記事には、「日本国民は相変わらず塩素処理によって生成されるトリハロメタンなど発ガン性

の強い有害化学物質から逃れられない危険性を抱えたまま」とある。何という悪意に満ちた記述だろう。トリハロメタンの発ガン性については完全に否定するものではないが、水道事業体はトリハロメタンによる人体への健康影響を防ぐため、厚生労働省による水質基準を遵守し、安全な飲料水を供給している。

発ガンに至る可能性は極めて少ないのに、水道水を飲み続けることで当然のように健康被害に至るかのような記述は、事実と反する。また、「現在の水道水には小児マヒウイルスのほかノロウイルスなど活性の病原性ウイルスが大量に混入している事実が東大大学院などの研究で明らかになっている」という記述も事実と反する。わが社が確認した同大学院の研究内容は、「河川が

ダイオキシン』が掲載された財界展望の12月号を見て納得した。『ダイオキシン』飲料水基準で国民を欺く『厚労省』の見出しの下に『脅威の安全な浄水システム』の広告があった。『ヒ素、硝酸性窒素、アスベスト、トリハロメタン、ダイオキシン』ほか水に溶け込んでいる化学物質を除去し、安全な水をつくりだす逆浸透膜浄水システム・地区販売店募集中』とある。「日本の水が危ない」シリーズの目的が分かつたような気がした。

誤りと曲解は許せない

本紙は、創刊50周年キャンペーンの一環として3月から「蛇口から水を飲む文化を守れ」をテーマに、水道事業者が日夜奮闘する姿を伝えてきた。水源の監視、高度浄水施設の導入、多項目にわたる水質検査の実施、ビル・マンション等の貯水槽水道への衛生管理の指導等々、数え上げればきりが無い。一部の雑誌や週刊誌の記事に目くららをたてるつもりはないし、水道界の自信にも揺らぎはない。しかし水道人の懸命な努力を台なしにする記事には怒りを覚える。

雑誌の水道水批判

WHOの飲料水ガイドラインは、その物質が発ガン性と考えられる場合には、ガイドライン値の濃度の飲料水を70年間飲み続けた時、人口10万人当たり1人の発ガンが起こる確率を持つと考えられる飲料水中の濃度で決定されている。日本の水質基準は総じてWHO飲料水ガイドライン値よりも厳しいのだ。トリハロメタンを原因として

ウイルスに汚染されていた場合、水道水に生きたウイルスが供給される可能性も否定できない」との記述に止まっていた。これでは研究の捏造であり意識的な曲解だと断定せざるを得ない。「痴呆症とアルミニウム」『ダイオキシン』による水道水汚染についても事実と反する記述が目立つが、もうここでは触れまい。

何故このような事実と反すること掲載するのか。シリーズ第7弾でも水道水を汚染する有害物質